鳥獣被害対策と地域振興－今後の農山村のあり方－

関連するSDGsの国際目標

環境科学部　生物資源管理学科　　講師　　加藤　恵里
研究分野：鳥獣被害対策、農山村、地域振興
地域資源管理

概要：近年、農山村ではイノシシやシカなどの野生動物による鳥獣被害が大きな問題になっています。農山村では、農林業の衰退や過疎高齢化などにより、地域資源管理の衰退が見られており、鳥獣被害はこの衰退の象徴の一つと考えられます。私の研究では、鳥獣被害の対策を考えるにあたり、野生動物側の視点に加え、被害にあっている農家や農山村の視点を取り込むことで、今後の農山村のあり方や、地域振興も見すえた鳥獣被害対策の構築に貢献することを目指しています。

■鳥獣被害とは

鳥獣被害とは、イノシシやシカなどの野生動物による農作物被害をはじめとした、生活被害、人身被害、精神被害などの人間と野生動物との軋轢のことを指します。これらの被害は、地域資源管理の衰退の象徴ということができます。すなわち、農林業という第一次産業の衰退、農山村地域の過疎高齢化、生活様式の変化などの社会的な変化が、農山村の自然の変化（二次的自然環境の荒廃）をもたらし、それが鳥獣被害の発生につながったという考えです。

そのため、鳥獣被害の根本的な解決には、野生動物の生態などの視点に加え、農山村にくらす人々の生活や仕事、農山村の活動など、農山村社会そのもののあり方を考えることが重要です。私の研究では、こうした社会的な視点から、今後の農山村のあり方や、地域振興も見すえた鳥獣被害対策の構築に貢献することを目的としています。

くくりワナにかかったイノシシ

■農山村の支援をめぐる人々

研究対象のひとつとして大切なのが、鳥獣被害対策をめぐる利害関係者です。現在の鳥獣被害の支援の中心となっているのは、市町村の担当職員です。しかし、市町村職員は、専門性や人手不足などにより、十分な支援をできていないことが問題となっています。こうした状況のなかで台頭しているものが、都市住民が主体となったNPO等の民間組織です。農山村や野生動物に興味をもっている「よそもの」の都市住民と、市町村等の地方行政、そして現場の農山村住民が、お互いの関係をいかに築き上げるかが重要な課題となります。

これらのNPO等の民間組織は、2015年ごろから設立が増えており、その概要も明らかになっておらず、仕事として成り立つか模索されている状態です。私の研究では、これらの民間組織の活動や、民間組織と市役所などの行政、集落との関係を調査し、新たな農山村のあり方のひとつのモデルを明らかにすることを目的としています。

集落住民による
共同の被害防除柵の設置

■地域振興への道筋

人口減少社会において、地方創生などの動きなどを受けながら、現代の社会において農山村はどのようにあるべきか、そのあり方が問われています。農山村の現場の住民が、どのような社会を描き、次世代につないでいくか、都市住民や行政がそこにどのように関われるか考えていきたいと思っています。

鳥獣被害対策について、
集落の地図に情報を書き込みながら
考える